Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼児の行為を「表現」という視点から考察するⅣ

― 造形に表れる幼児期の本質的な課題への取り組み過程 ―

○ 荒木照子　幡井麻矢　島本麻美　角 志津子　村岡美津子
（岐阜聖徳学園大学）（鷺森幼稚園）（鷺森幼稚園）（鷺森幼稚園）（鷺森幼稚園）

1．研究の視点

パートⅢで見たように、N児を見る目の変化は、保育者のN児に対する認識を大きく変えることになった。N児は「‥何もしない」でいたのではなく実は、「じっくりと自分の本質的な課題に取り組んでいた」ことがわかった。N児のさまざまな行為をその内面の世界の表現として推察してきた過程で、私たちがとくに関心を抱いたことがある。それはN児の、深く質の高い内的世界を私たちに見せてくれたのは、N児の行動や言葉に加えて、(一見、造形的に質が高いとは思えない)描画や製作物だったことである。

そこでパートⅠとⅡの研究で、その後の課題としていた<幼児の身体的な表現と造形的な表現との関係>に焦点を当てながら、次のことを考察する。

行為と造形から見られる本質的な課題は何か、その課題への取り組み過程はどうか、幼児期の育ちに造形的な表現はどんな役割を果たすのかなどについて、パートⅠとⅡで研究対象にしたT児も含めて、二人に共通している傾向を見る。

2．研究の方法

・N児について、幼稚園で観察、収集した資料と家庭で収集した資料（行動観察記録、ビデオ、描画・製作など）を、時間の流れに沿って整理する。
・次に関係があると思われる行為と造形が生み出される内面を推察し、本質的な課題を推察し、整理した。
・「身体的な表現と造形表現から読み取れるN児の本質的な課題への取り組み過程」の表の制作をする。
(網掛け部分は身体的表現、「　」は造形的表現である)

3．研究の内容

1）N児の造形的表現と行為にみる本質的な課題

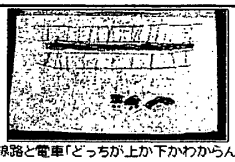
①主体性について…N児は自分にも他の子にも、大人の価値判断に照らして、よく「よい子、悪い子」という見方をしていた。しかし次第に、規範に無条件に従う自分に疑問を抱き始め、さまざまな試みをする。(画用紙の縁に沿って走る電車の絵、自分の創った道筋に沿って遊んだことを再確認する絵、アバレンジャーの絵など)

②存在性について…家の引越しや年中組への進級直後は、自分の居場所や存在が不安定になる。新しい友達集団と自分の存在の関係について模索していく。(友達集団の象徴として剣を丸め、それに自分を象徴するサイコロをゴムで、“付かず離れず”につけた製作、家の中での自分の存在を確かめていると思われる絵など)

③相互性について…友だちとの関係をどうつくるか試行錯誤が続く。(ペットボトルの電車を自分に見立て、異質な素材の電車を友達に見立て手連結させる。友達に受け渡していくリレーのバトンを作って、自ら友だちと繋がりを持とうとするなど) 中途入園した妹をめぐって仲間との関係の模索が続く。(子どもを守る皇帝ペンギンを、妹を守る自分に見立てた製作や絵など)

④創造性について…与えられた課題をきちんとこなしてきたN児が、もっと積極的な、創造的な自分になりたいという課題への取り組みがなされていく。(折り紙で二つ“9”の字を切り抜き一つだけ立体にする。<折れた剣>から発想転換をして<釣竿>に作り変える。“わからん”という絵の後に、枠に入った数字と、恐竜と火山を同じ紙面にかく。将棋盤の升目の中でも自由に動くことができる駒などを作る)

造形表現と行為から読み取れる、N児の本質的な課題への取り組み

年少組　9月から					年中組
主体性	ふざける子に「悪い子!」という	「線路(画用紙の縁)の上を走る電車」	線路からはずして電車を走らせる	 「線路と電車「どっちが上か下かわからん」	
	靴をきちんと揃える、枠に沿って絵や字を書く、規則に従順な自分を意識し始めて、あえて路線から電車をはずして遊ぶ姿が出てくる。				
存在性	先生のすぐそばに座る	「手裏剣」（家からもってくる）		「僕、みんなのこと知らない」と言う	「人か何かわからない」	「お家 」の製作
相互性	異質なものをつないだ電車で遊ぶ	「異質な紙を重ねた絵 」		重たいバケツを引き摺って友だちの側にいく	「太鼓と撥」の製作
創造性	折り紙で「9と9」の製作	ブロックを不定形に組む		「破れたらどうする?」「また塗げたらいいやん」	折れた「剣」を「釣竿」に

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

2）TとNに共通する課題への取り組み過程

＜混沌のトンネルを潜りある価値に行き着く過程＞

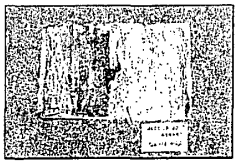
T児の事例

（クラゲの目が描けないと泣く）

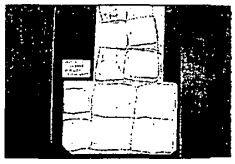
（悪いクラゲと善いクラゲを描く）

クラゲも自分と同じように、善悪を合わせ持って生きているのではないかと思ったらしく、クラゲの目をどのように描いたらよいかわからなくなって泣き出す。その翌日には、悪いクラゲと善いクラゲが手を繋いでいる絵を描き、一つの納得を得て、落ち着く。

N児の事例



「なんかわからん」



「将棋盤と駒」

規則に従順に従う受動的な自分に疑問を感じて、いろいろと規則破りを試みるものの、生来几帳面なN児の内面では葛藤が生じたようである。「なんかわからん」という絵を描いた翌日に、将棋盤の升目の中でも八方に矢印を描いて、自在に動き回れる駒をつくる。規則や規律の中においても自由があることに気付く。

T児とS児に共通してみられるのは、それぞれの子どもの中で、自分の大事な課題に取り組んでいるある段階で、“混沌のトンネル”に出くわすことがあるらしい。そのトンネルの中で、T児は「目、描けやん」と泣き出すほど混乱し、N児も「なんかわからん」と困惑しながら2色に塗り分けた絵を描いた。しかし二人ともその翌日にはトンネルを抜け出して、T児は生き物がもつ一つの理に行き着き、N児は規則の中にも自由があるという気付きに至っている。

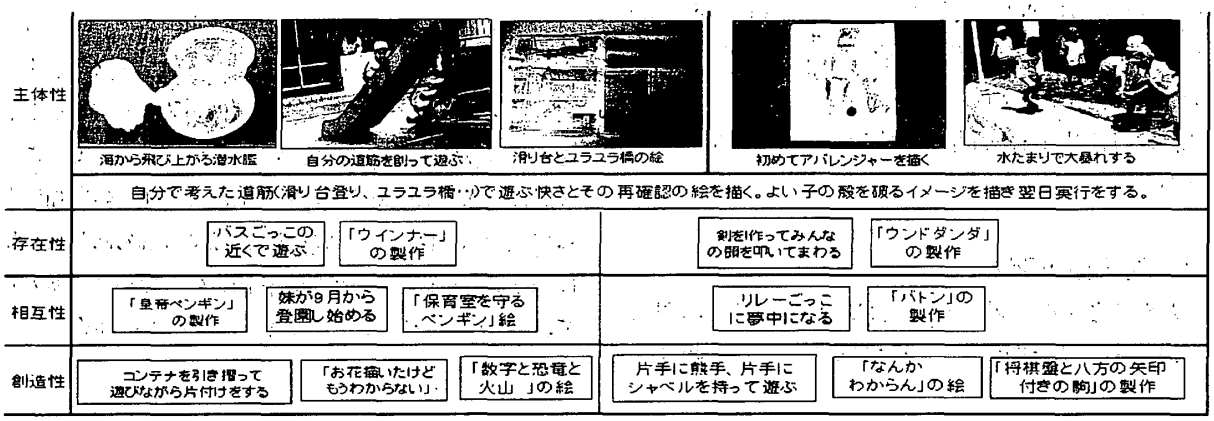
4．結果と考察

1) T児とN児の持つ特性、生育暦、発達などの相違から内面に抱える課題はそれぞれに独自のものに見えるが、本質的な課題として捉えれば、主体性、存在性、相互性は共通していた。その他の課題として、T児には「価値の感受」として括ったが、N児については「創造性」として括ってみた。他の幼児についても研究し、幼児期の共通課題を考え続けていきたい。

2) 幼児が造形的にも身体的にも混沌とした、あるいは混乱した表しをすることがある。それらはおとなや保育者の目には価値の低いものに映りやすい。しかしそれは、幼児が新たな価値を見出す、あるいは一つの大きな気付きに至る“混沌のトンネル”を潜っている過程かもしれないと、ていねいに受け止める必要がある。

3) 幼児が自発的に始める造形的な表現には、その内面における自分の生き方を創るための本質的な課題への取り組みが表れることが少なくない。自分では明確に意識できないけれども、心の奥から発酵してくるような思いを外に表出・表現し、自分自身で納得するには、(あるいは他の人に伝達するには)身体、言葉の表現とともに、造形的な表現は欠かせない表現手段である。

4) 本質的な課題への取り組みが表れる造形は、身体的な表現をも伴ってなされることが多い。造形が行為の前になされる時と行為の後になされる時とある。行為の前の造形にはそのシミュレーションとしての意味をもつことがあり、また行為の後の造形にはその行為の意味の探索としてなされるのではないか。年中ではシミュレーションとしての造形が、年長では再認識としての造形が目立つように思われるが、この仮説についても継続的に研究していきたい。



NII-Electronic Library Service